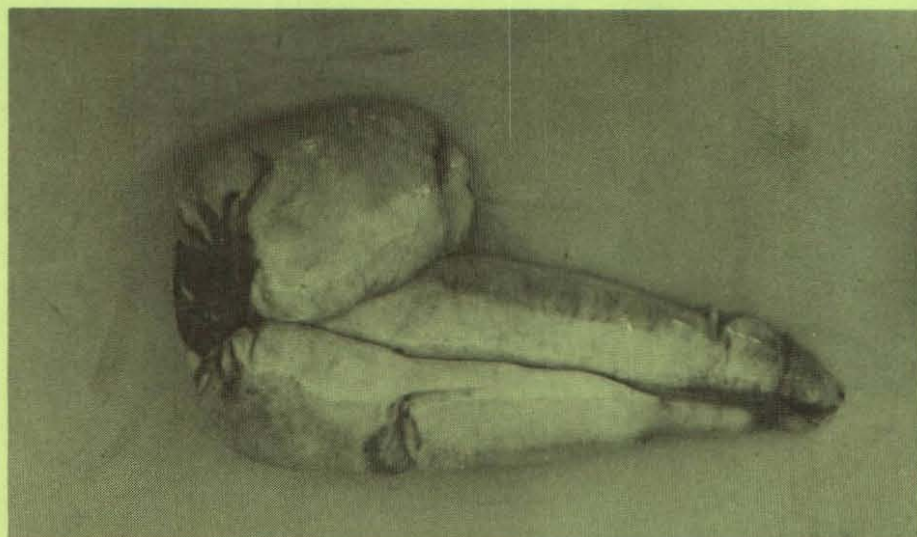


釧路水産試だより

46



サケの雌雄同体生殖巣の珍例

- 元場長 桜井基博氏
釧路市文化賞授賞のご紹介
- 今年 of 道東沖マイワシ漁の特徴
- 白糠沖のヤナギダコ増養殖造成事業調査
- 北海道立釧路水産試験場職員名簿
- 離着任の御挨拶

昭和55年11月

北海道立釧路水産試験場

元場長 櫻井基博氏

釧路市文化賞授賞のご紹介

結城了伍



十一月三日文化の日に当り、櫻井元場長が釧路市文化賞を授与されましたことは、新聞テレビなどで報道され、皆様方もよくご存知のことと思いますが、ここに改めてご紹介いたします。

同氏は明治四十三年一月十五日、函館市に生れ、昭和八年北海道帝国大学附属水産専門部（現在の北海道大学水産学部）を卒業され

直ちに北海道鮭鱒孵化場に勤務、十四年に北海道水産試験場（余市町）に移られ、二十四年には同釧路支場長にご栄転されました。三十九年の機構改革により、北海道立釧路水産試験場の初代場長に就任され、四十二年に場長をやめられたあとも、特別研究員として四十四年まで、道東海域の漁業資源など幅広い研究をなされたあと、四十四年より社団法人釧路水産協会参与、翌年常務理事に就任、五十年には同専務になられ、水産業界のご指導と良き相談役として、誠心誠意ただひたすら漁業の発展にご尽力されました。昨年より同協会の参与にりましたが、今日なお業界の良き相談相手であり、貴重な助言者でもある次第です。また、この他に釧路市の公害審議会、博物館などの委員としてご活躍しております。

同氏が釧路市にこられて三十余年になりませんが、その間永年にわたり沿岸の重要な漁業資源の維持培養に関する調査研究に努力され

るとともに、業界のご指導、技術の普及に努められた他に、道東海域の漁海況予報の基礎づくりをされるとともに、速やかに漁業者に広報され、漁業生産に大きく貢献されました。特に、昭和二十九年には現在の北洋漁業の新魚田開発のため、南千島海域の底曳網漁業の開拓指導に尽力され、日本の水産漁業の発展振興に大きく寄与されました。また、三十二年以来エビ桁網、シシャモ桁網及びスケソ刺網の各漁業に関する道東海域におけるこれら漁業資源の調査研究を精力的に進められ、資源の維持培養に努められるとともに、漁船漁業の実践のご指導に積極的に尽されました。これらの永年にわたる業績は極めて高く評価されていることは、衆知のところ です。

これらの功績によって、水産庁長官始め、海上保安部長、北海道知事、釧路市長及び各種水産団体などから表彰状や感謝状を数多く受けられており、釧路市の文化の振興に大きく貢献されましたので、このたびの授賞と相成った次第です。

授賞式は釧路市商工会館に市内在住の関係者三百余名が参列して、盛大厳粛に行なわれました。引きつづき祝賀会では華子夫人ともども多くの友人、後輩者から祝福された次第です。

今年の道東沖マイワシ漁の特徴

漁業資源部

七月一日から始まった道東沖の沖合施網によるマイワシ漁は一〇月三十一日で終漁となったが、総漁獲量は例年同様二四カ統の操業で五五万トンである。この量は、前年同期の八九%で予想を若干下回ったが、漁況の特徴は次の通りである。

一、漁獲物の年令構成は、漁獲量の多い順に並べると三才魚・二才魚・四才魚・当才魚で、昨年春に生まれた一才魚は、発生量が比較的多かったにもかかわらず、来遊量が極めて少なかった。一才魚がこのように少

ないのはマイワシ主体に変わった五一年以降始めての現象である。

二、初漁以来九月末までの漁獲量は、前年並みかそれをやや上回っていたが、一〇月は不振であった。例年、漁期後半の主群は、一才魚と二才魚であるが、今年は一才魚の来遊量が非常に少ないため、一〇月の漁獲が伸びなかったと考えられる。

三、主漁場は、広尾から大津と大黒島から落石の沿岸部に形成されたが、漁場範囲は前年よりも狭かった。

白糠沖のヤナギダコ増養殖造成事業調査

漁業資源部

一、はじめに

道東で、白糠のタコと言えばヤナギダコを指すほど白糠ではヤナギダコの生産が多い。

ところが昭和四九年からタコの漁獲量が急激に減少し、漁業経営に困窮を来たしたのでこのタコ資源の維持増大が強く望まれ、その

対策として人工産卵礁と幼稚仔保育場を造成することとなった。

この事業を進めるに当り、釧路支庁水産課釧路西部地区水産技術普及指導所などと協同で、自然環境調査、生物調査、施設試験調査を実施したので、それらの調査結果を紹介する。

二、白糠地区の概況

白糠地区は農林水産業の一次産業を中核として、これら地場資源を活用した水産加工、木材品などの二次産業から成り立っているが基幹産業である漁業は、五二年より実施された二〇〇海里のため北洋や沖合漁場が制約を受け、沿岸資源の維持増大をはかることが緊急な課題となった。

白糠地区五三年の就業者総数は、七、一五八人で、そのうち漁業者は七四人で一〇・四%を占める。産業別生産額は総額が約八億円で、そのうち漁業生産は三五%にもなり農林業や第二次、第三次産業よりも多く、重要な位置を占めている。就業者一人当りの平均生産額は約一二三万円であるが、漁業はサケ定置網の水揚げが影響して最も多く四一五万円である。

次に、五三年の漁業生産は数量で五、七七五トン、金額で三一億円である。このうちサケ・スケトウダラ・シシヤモ・ケガニの合計金額は全体の八五%を占めているが、ヤナギダコは資源が回復したので数量で三七五トン、金額では七、五〇〇万円（二・四%）である。

漁業種類別の経営体数は、カニ・スケトウダラ・カレイなどの刺網漁業が全体の三二%

を占めているが、タコ空釣り漁業は二一%、
で単一漁業としては最も多い。なお、漁船規
模は大部分三〜五トンである。

三、調査結果

〔一〕 自然環境調査

ア 海岸線及び海底

白糠町管内の海岸線は、直線的な海食崖海
岸で背後の陸域は白糠丘陵と呼ばれる標高二
〇〇メートル〜三〇〇メートルの丘陵性山地
で、海岸線に向って緩やかに標高を上げてい
る。

海底形状は、海底勾配が千分の四〜千分の
五と比較的ならかである。水深毎の底質は
水深三〇〜四五メートル付近では岩盤又は礫
であり、水深六〇メートルでは細粒砂で砂層
厚は一〜三メートルである。

イ、波浪・流況

五〇年四月から五二年三月までの調査によ
ると月別最高・最低の波高は、二月が五・五
メートル、七月一・六メートルである。つま
り春から夏は風が多く、秋から冬は時化が多
い。波の方向は、南が最も多くなっている。

次に潮の流れは、五二年七月〜九月の調
査によると、釧路沖からでは西方向であるが
庶路沖から東への反流もみられる。

ウ、海況

五四年四月から一〇月までの、釧路からエ
リモ岬沖の海況調査によると、表面水温は四

月が一度位、六月は気
温が大きく影響し五
一〇度、八月に入ると
黒潮系水の発達で一五
〜一七度、一〇月では
親潮沿岸分枝の発達に
よって降温し一三度と
なっている。

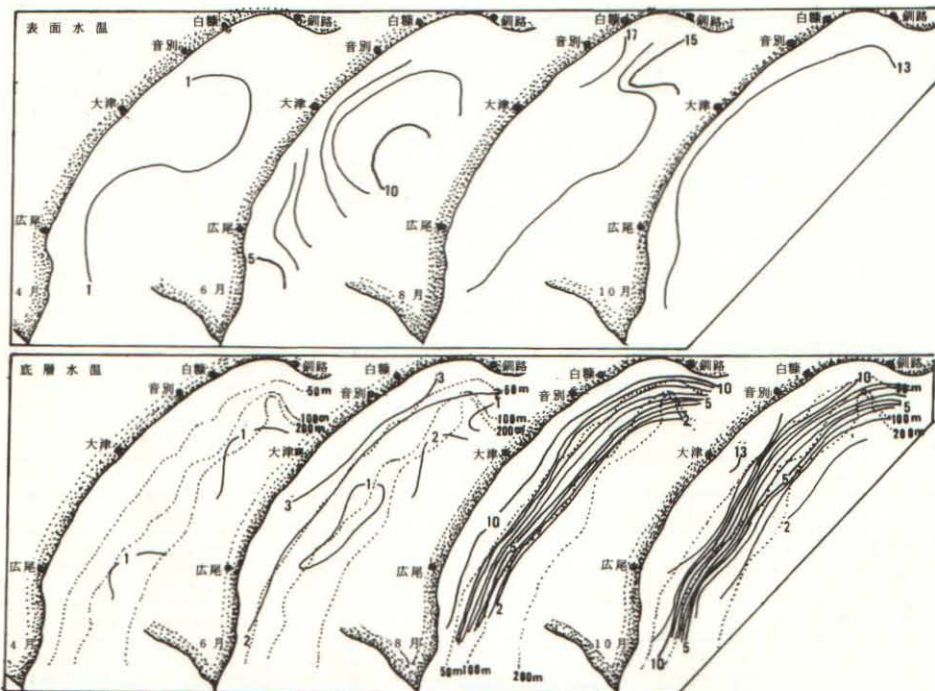
次に底層水温は、
四月と六月は一度〜三
度で低温であるが、八
月と一〇月では陸側が
高温、沖側が低温であ
る(第一図)。

〔二〕 生物調査

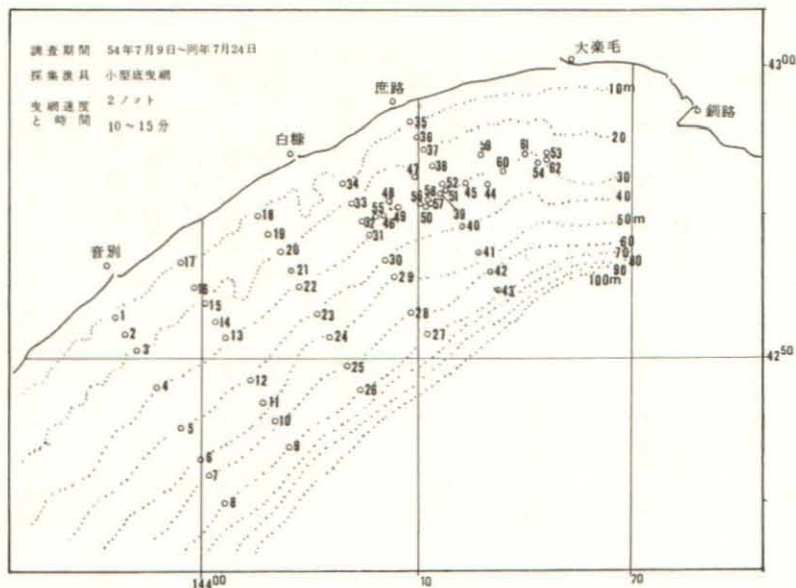
ア ヤナギダコ幼

稚仔の分布

幼・稚仔がどこでど
のように棲んでいるの
かを明らかにするため
五四年七月九日から、
二四日まで大葉毛から
音別沖の水深一〇米か
ら七〇メートルまで、
六一カ点について標本
採集用の小型底曳網で
調査した(第二図)。



第1図 54年春〜秋の海況

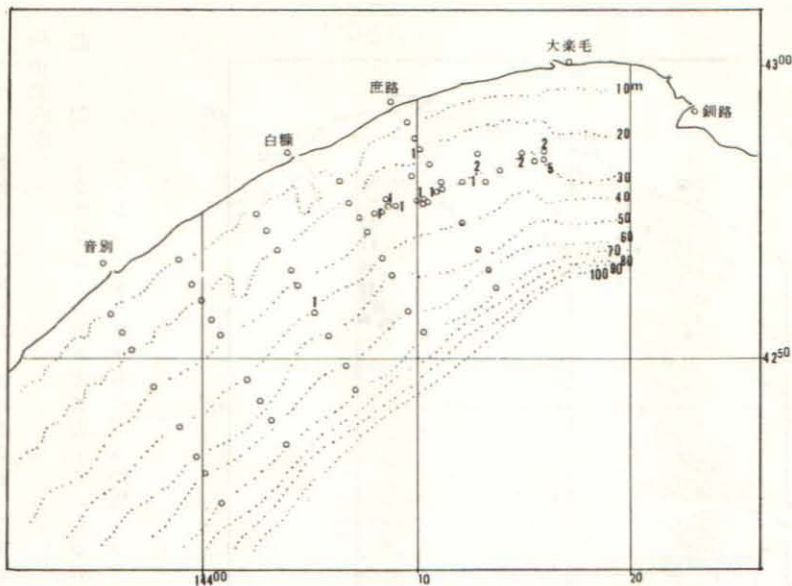


その結果、第一回目（七月九日～一八日）では七カ点で九尾採集された。そのうち体重

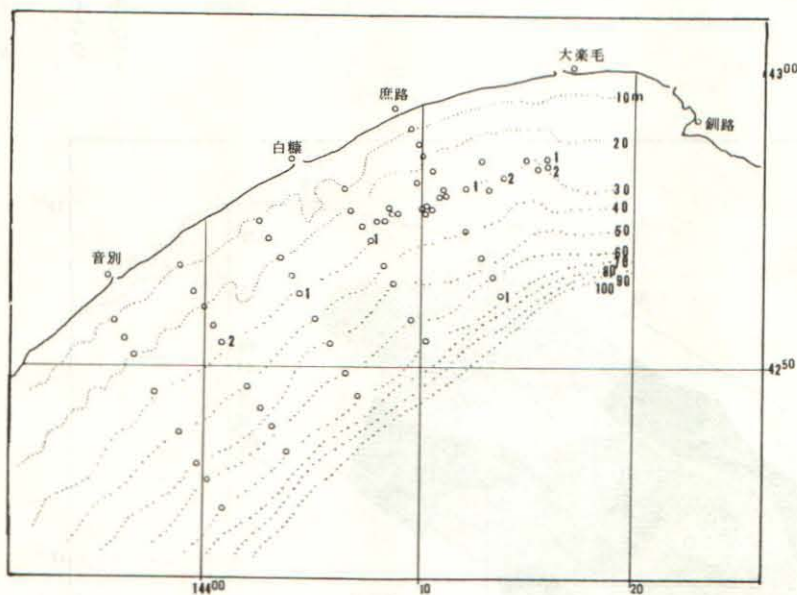
第2図 幼・稚仔の調査点

第1表 ヤナギダコの採集地点と主な動物

回	採 集				ヤナギダコ 体 重 組 成 (gr)												優 占 種			
	地点	月日	時間	水深	1gr 49	50 99	100 119	200 299	300 399	400 499	500 599	600 699	700 799	800 899	900 999	1000 1,099		計		
一 回 目	13	7月	90時 17分	30m				1	1								2	オニカジカ、ヤドカリカイメン、ヒトデ		
	22	"	10時 11分	30						1							1	ヤドカリカイメン、オニカジカ、ヒトデ		
	23	"	11時 10分	40	1												1	2	オニカジカ、カラフトカジカ、ヤドカリカイメン、ケガニ	
	31	"	09時 10分	30						1							1	1	ヤセトクビレ、エビジャコ	
	37	"	08時 9分	20		1												1	1	ソウハチガレイ、エビジャコ、ヤドカリカイメン
	39	"	10時 45分	30	1													1	1	オニカジカ、エビジャコ、フジコ
	43	"	10時 18分	70									1					1	1	クビレバイ、エゾキリガイダマシ
二 回 目	45	"	12時 19分	30	1				1								2	2	ゲンタイボヤ	
	46	"	10時 05分	30		1											1	1	オニカジカ、カラフトカジカ、ヒトデ	
	49	"	08時 05分	30	1												1	1	オクカジカ、カラフトカジカ、エビジャコ、ヒトデ	
	53	"	04時 24分	30	1	1			1								3	3	カラフトカジカ、ケガニ、ヒトデ	
	55	"	11時 23分	30	1												1	1	エビジャコ	
	58	"	09時 35分	30		1											1	1	ヤドカリカイメン	
	59	"	08時 50分	30	2												2	2	オニカジカ、カラフトカジカ	
	60	"	08時 10分	30					1				1				2	2	エビジャコ	
	61	"	07時 33分	30	2												2	2	オニカジカ、カラフトカジカ	
	62	"	07時 00分	30	3	2	1			1							7	7	オニカジカ、カラフトカジカ、ヒトデ	
計					13	6	1	2	4	2		2				1	31			



第3図 ヤナギダコ小型 (99gr 以下) の分布



第4図 ヤナギダコ中型 (100~999gr) の分布

一〇九九グラムが三尾、二〇〇〇〜六九九グラムが五尾、一、〇〇〇グラム台が一尾であった。

第二回目(七月一九日〜二四日)は、前回

水深三〇メートル付近でヤナギダコの幼・稚仔が採集されたことから、大楽毛と白糠沖の水深三〇メートル帯を徹底的に調査した。

その結果、一〇カ点で二二尾採集された。

そのうち体重一〇九九グラムが一六尾、一〇〇〜六九九グラムが六尾であった。(第一表・第三図・第四図・第五図)

以上二回の調査からヤナギダコの幼・稚仔

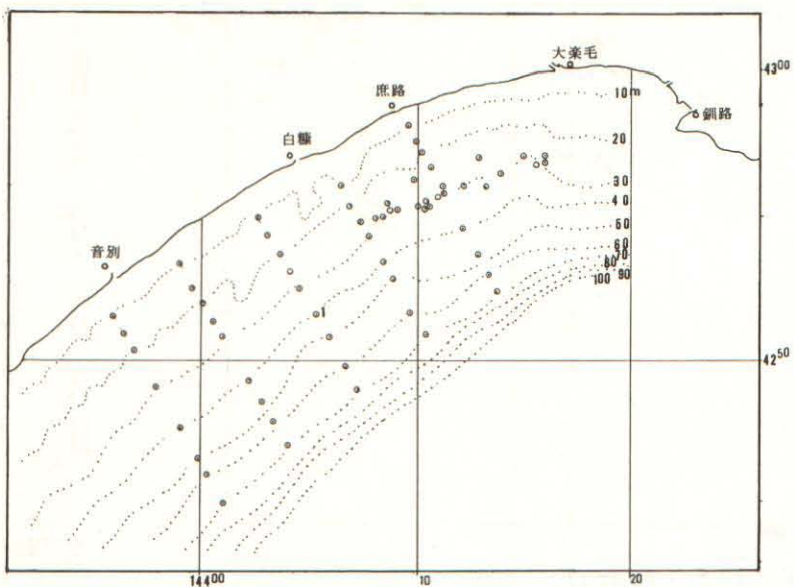
は、主に水深三〇メートル付近に多いと考えられた。

また一〜四グラムの稚仔が八尾採集されたが、これは従来仮説していた冬の産卵群に由来し、春から夏頃にふ出したものと推定される。

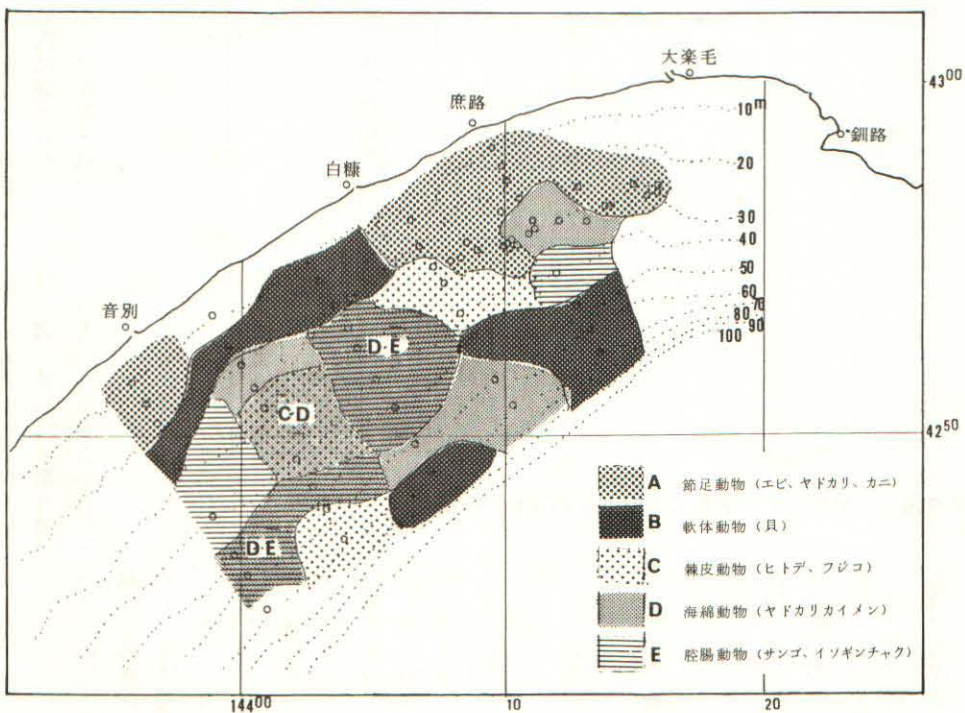
1 底棲生物の分布

今回の調査で採集された動物は、魚類六五種、海綿動物三種、腔腸動物二種、環形動物二種、軟体動物二種、節足動物一種、棘皮動物八種、原素動物一種の計一一九種である。

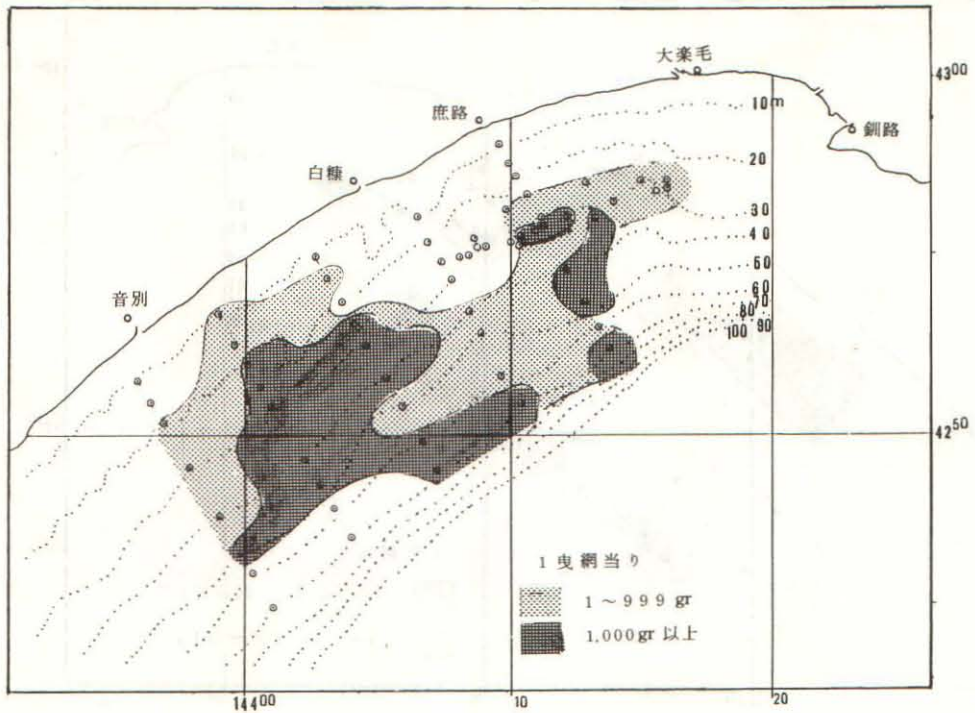
ったが、比較的多く出現した。種は次の通りである。(魚類以外の
 分布第六図)
 魚 類 オクカジカ・シラミカジカ・オニカジカ・カラフトカジ
 カ・シシヤモ・スケトウダラ幼魚・ソウハチガレイ幼魚・



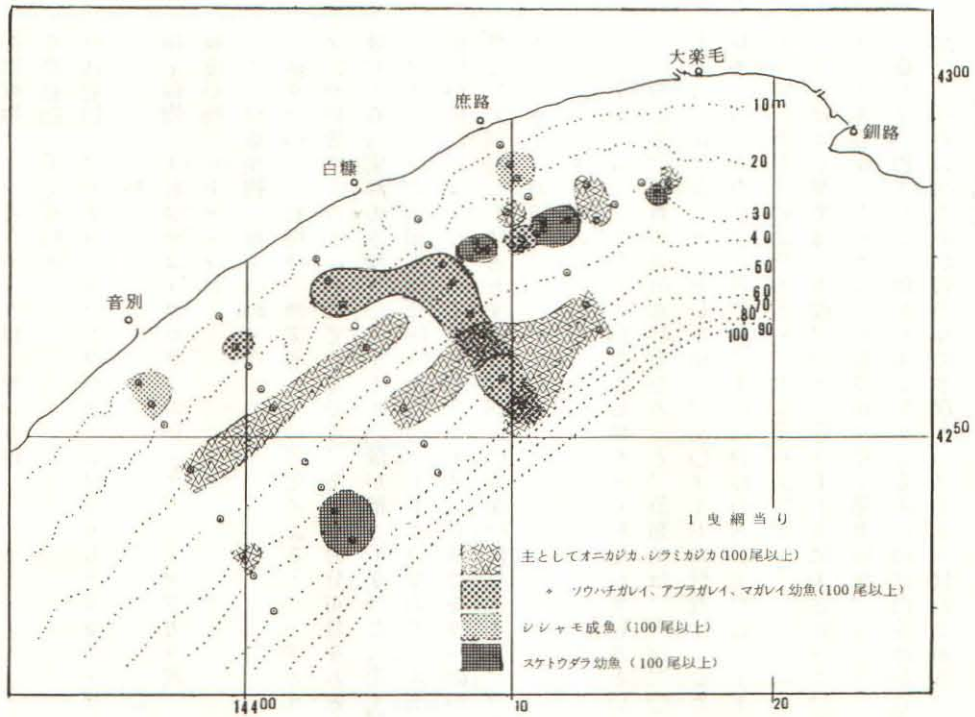
第5図 ヤナギダコ大型 (1000 gr 以上) の分布



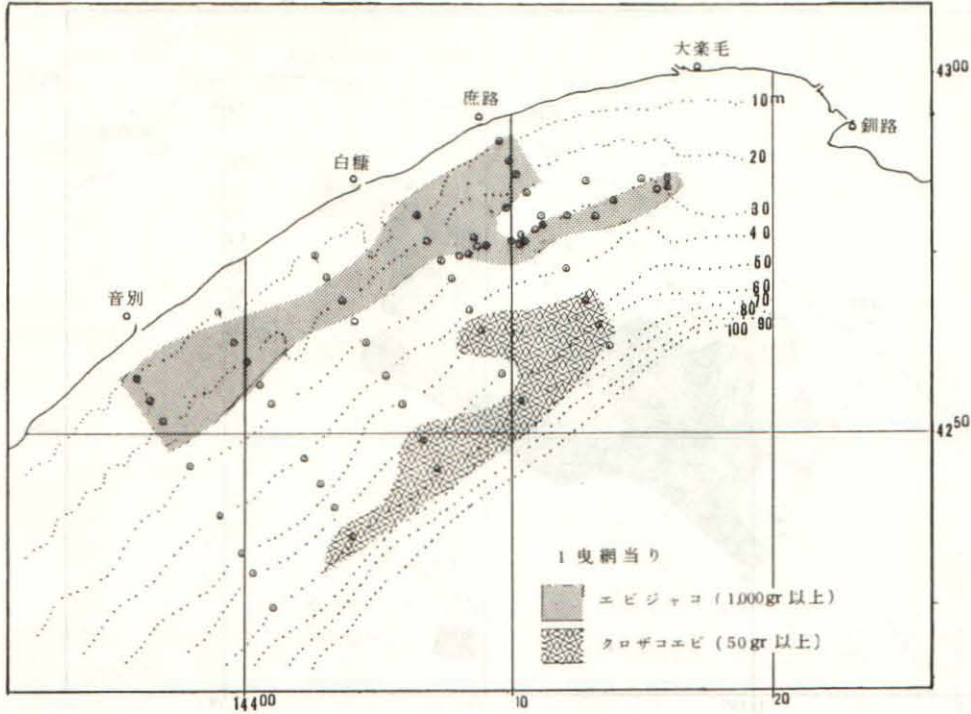
第6図 魚類以外の底棲動物 (優占種) の分布



第7図 ヤドカリカイメンと貝殻の分布量



第8図 主な魚類の分布



第9図 エビ類の分布

海綿動物 ヤドカリカイメン

腔腸動物 イソギンチャク目・サンゴ目

環形動物 多毛環虫綱

軟体動物 アヤボラ・エゾシワバイ・エゾキリガイダマシ・ザルガ

イ科

節足動物 エビジャコ・クロザコエビ・ケガニ・ヤドカリ属

棘皮動物 ヒトデ・フジコ

ウ 底棲生物と稚ダコの分布

稚ダコのかくれ場は、漁業者からの情報によると、ヤドカリカイメンや貝殻であるといわれているので、それらの分布量を見ると白糠沖から音別沖の水深三〇メートル以深が最も多かった(第七図)。

ヤナギダコの産卵水深は四〇〜九〇メートル位なので、ふ出した稚子が付近に存在しているヤドカリカイメンや貝殻を唯一のかくれ場として利用しているとすれば、前述の水深帯にまとまった分布があると推定される。

エ ヤナギダコの餌の分布

ヤナギダコは餌として魚類やエビ類を多く利用しているといわれているので、それらの分布状態をみると、魚類では、水深二〇メートル以浅にシシャモとカレイ幼魚、三〇メートル付近にカジカ・カレイとスケトウダラの各幼魚、また白糠沖の五〇〜七〇メートルにカジカ・カレイの幼魚が多かった(第八図)。

次にエビ類では、水深一〇〜三〇メートルにエビジャコ、五〇メートル以深にクロザコエビが多かった(第九図)。

総じて、餌としての魚類やエビ類が最も多いのは白糠沖から庶路沖で、それに次ぐのが音別沖の水深三〇メートル付近である。

(三) 施設試験調査

ヤナギダコは、海底の古タイヤや魚箱などに卵を産みつけている

ことから、産卵の対象物として何が適当であるかを明らかにするため、五〇年、五一年、五二年の三カ年、白糠沖水深五八メートルに直型素焼土管・T型素焼土管・タコ箱・丸タイヤ・半切りタイヤ・コンクリートブロックなどを連結して投入し、タコの入礁状況を調査した。

その結果(第二表)、入礁について三カ年の平均では、直型素焼土管とタコ箱が最も良く、次ぎにT型素焼土管と丸タイヤであった。入礁していたヤナギダコは雌八四%雄一六%で、雌は大部分産卵済みであった。

なお、産卵礁の内・外面をみると、素焼土管とコンクリートブロックには付着物が殆んどなかったが、タコ箱とタイヤにはフジツボが付着していた。また産卵礁はいづれも一方が泥でふさがるか、泥が入っていた。

四、ヤナギダコの生態

従来の知見や今回の調査などからヤナギダコの生態を整理すると、概略は次の通りである。

卵 期 卵径は一七〜二二ミリメートル

で海底に存在する古タイヤ・魚箱・鉄板・ヤカンの中にすき間なく産みつけられている。

稚仔・幼体期 ふ出した直後の稚ダコは全長二

第2表 三ケ年間のタコ入礁状況

50年・51年・52年のタコ入礁状況(産卵入礁率)

産卵礁		年度	50	51	52	計	備 考
タコ箱	引上数			17箱	8箱	25	()内は、産卵のため入礁した礁数
	タコ入礁数			(3) 4箱	7箱	11(10)	
	タコ数			5箱	10箱	15	
	産卵入礁率			17.6	87.5	40%	
直型素焼土管	引上数			34	13	47	
	タコ入礁数			11	9	20(20)	
	タコ数			11	9	20	
	産卵入礁数			26.4	69.0	42.5%	
T型素焼土管	引上数			34	15	49	
	タコ入礁数			7	6(5)	13(12)	
	タコ数			7	14	21	
	産卵入礁数			20.6	33.0	24.3%	
丸タイヤ	引上数	36		36	15	87	
	タコ入礁数	9		6	3	18(18)	
	タコ数	15		7	5	27	
	産卵入礁数	20.5		16.7	20.0	20.7%	
半切タイヤ	引上数			29	6	35	
	タコ入礁数			1	1	2(2)	
	タコ数			1	1	2	
	産卵入礁率			3.4	16.6	5.7%	
60K コンクリート ブロック	引上数			17	2	19(1)	
	タコ入礁数			2	0	2	
	タコ数			2	0	2	
	産卵入礁数			5.9	0	5.2%	
30K コンクリート ブロック	引上数	61		17	2	80	
	タコ入礁数	1		1	0	2	
	タコ数	1		1	0	2	
	産卵入礁数	1.7		5.9	0	2.5%	

離着任の挨拶

退職のご挨拶

大島 浩

この「釧路水試だより」には毎回のよう
に「何か書いてくれ」ということで、十数編
の駄文を載せましたが、今回はじめて『決
められた題名』で最後の原稿を書くことにな
りました。

顧りみますと、昭和十九年六月に、余市の
水産試験場で「魚眼中のビタミンB₁」の仕事
を行って以来、多くの先輩、朋友と共に飽き
もせず、次から次へと色々な試験・研究・調
査など三十六年も続けてこられたものだ、と
吾れながら感心している次第です。

私は一年程ですが、海軍の飛行科予備士官
として軍務につき、敗戦を迎えました。この
とき、友人も切腹し、部隊長のM少佐も「諸
君を特攻としたことを詫げる」と切腹されま
した。私のすることは、徹底的に破壊された
日本と、飢えた同胞の中で、これを復興させ
ることが責任だと考えざるを得ませんでした。

そして戦に敗けたのも、この日本を復興させ
るのも科学技術しかないと考え、父の薦めで
水産試験場に勤め、この目的を達しようと思
うことになったと云えます。

現在、幸に日本国民の努力によって荒廃し
た日本は再建され、飢えもなくなり、水産業
も、世界の海へ展開し、歴史上最も繁栄した
経済・科学技術は世界の人々から高く評価さ
れております。この三十余年間は、私の水試
の三十余年間なのです。そして、私は、ラッ
キーにも、ニシン場の余市、底曳全盛の稚内、
北転船・北洋全盛の釧路と、最も華かな水揚
げ地で勤務することが出来ました。

しかし、このような物質的な発展自体、余
りに急激で多くのアンバランスがありましょ
う。また科学技術の生産、豊かさを求めるあ
まりに多くの矛盾（たとえば公害）をもたら
しております。

今後の若い研究者の皆さん、生産者の方と
ともに、今後の命題は、私共の時代のような
単純な「生産拡大による豊かさの追求」とは
云えないでしょう。いろいろ難かしい課題が
あると考えますが、「世界の海洋資源をいか
かに有効に人類のため利用するか。」という大
命題のために、最も優れた日本、そして北海
道の科学技術を基礎として、のびのびと試験
研究そして生産が行われることを切望して、

退職のご挨拶といたします。
いろいろ、ありがとうございました。

離釧によせて

稚内水試加工部長

相沢 悟

昭和二十四年釧路水試が北海道水産試験場
釧路支場として開設されると同時に私は水試
入りを致しました。そしてこのたび初めての
転勤を体験して何かと途惑いを味わってお
ります。

在釧中を思い起してみますと、後期の二〇
〇海里時代を除いた前期、中期とも漁業の成
長期にあり、これに対応して加工業の成長の
一途を辿った中での試験研究業務でありま
したので、加工関係は云うにおよばず沿岸漁
業関係市町村に係る問題も課題として色々な
仕事にたづさわって来た事が昨日のように思い出
されると共に、この取組みにはいづれも現場
を試験研究の接点として、とらえてきたこと
もあり関係者の皆様とは深いかかり合いをも
ち、一人一人の顔が目に見え、かみかみ合います。
こうしたことが仕事の進行上また自分の研鑽
上誠に有意義であったと思ひ出されています。
ここに初めて、仕事の機会を与えて下さり、且

また御協力賜った皆様に対し心から深謝申し上げます。

昭和二十四年、この年は釧路沖で初めて流し網による大鱈の漁獲があり、一方ではサンマの棒受網漁業がようやく本格化の兆しを見せいわゆる回游性の浮魚が釧路に水揚げされこれ迄の底曳漁業と相まって道東漁業発展の緒年となった年でもありました。その後は御存知のとおり年を追って成長・発展を繰り返して釧路市を中心とした道東が水産王国としての基盤形成がなされて行く訳ですが、この間決して安泰の中で発展ではなく成長過程の中にもそれなりに数多くの難問難題が幾多横たわって居たことを知っております。これ等の解消に御努力なされた関係の向きには敬意を表さなければならぬと思ひます。

現今は二〇〇海里問題、魚離れ等成長期の後遺症の問題が山積して厳しい状況にはあります。が過去に実践して来た勇氣と英智をもって必ずや水産王国の地位を確保されるだろうことを信じております。

このようにしてみますと皆様の御好意、御指導こそ受け乍ら、何の役にも立たなかつたことをおわびしなければならぬ念にかられます。稚内も御承知のとおり水産が主産業であり、そうした意味では北海道はどこでも同じであると云う觀念に立ち釧路での御厚情に

むくいるため精勵したいと考えておりますので、今後共御交誼賜りますことを祈念いたしまして御挨拶といたします。

転任のご挨拶

稚内水試増殖部長

龍 襄

四月三十日付で釧路水試から再び稚内水試へ転出することになりました。五一年八月から今日まで、公私にわたりひとかたならぬご厚情とご指導を賜わり、心から御礼申し上げます。

四年前、三十数年振りに道東に戻り、水産業の発展した姿をみまして驚嘆の声をあげるのみでした。その後、世の中は大きく変わり二〇〇海里時代に入りました。これに対処すべく浅海資源の調査に夢中で過した四年間でしたが、その間に皆様から多くのことを学ばせて頂きました。今後は道東で学びましたことを道北での仕事に生かして参りたいと存じます。一層のご支援とご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

皆様の益々のご発展とご健康をお祈り申し上げます。

釧路を離れて

北海道立栽培漁業総合センター

総務課長 原 信義

鹿部に赴任してまだ一ヶ月余りですが何かと釧路での生活が思い出されます。釧路水試での七年間、皆さんには公私にわたり本当にお世話になり紙上をお借りし、厚くお礼申し上げます。

釧路の追憶、それは魚の街、我が国において八戸と並び、漁獲高一、二位を競う漁業基地と聞いておりましたし、まさにその通りで活気に漲る港には目を見はるものがあり、漁獲規模の大きさにも驚いたものです。さらに漁民と試験機関とが一体となり、漁業の発展に貢献している様子に接し感動し私も、皆さんのそうした心意気に追いつこうと、心あらたにさせられたものでした。

釧路市発行の釧路新書によると、釧路市の開基は明治三年ですが、それより以前、安政三年に箱館が開港されたことよって、清国向けの輸出昆布の生産の集荷地として和人の漁夫が多く渡って来るようになり、こうした漁夫が釧路の海岸沿いに住居を設け、又、番屋に居住して漁業に従事したことに、はじま

ったとされています。それに、釧路地方には多くの地下資源や森林資源、幾つもの河川があり、それらの開拓と、ともに漁業も発展し現在の漁業基地に至ったものと思われま

今は、水産業界も二〇〇海里問題に端を発して一段ときびしさを増し、北海道沿岸漁業が見直されて、資源の管理、資源の管理、資源の培養等が云々される昨今となりました。

私も鹿部に着任し栽培漁業推進の一助としてのセンターの研究状況をじっくりと見聞するにつけ、漁業と研究機関との関連の重要性をつくづく痛感させられます。

私は直接、研究にはたづさわりませんが研究員の、皆さんが思う存分、試験研究に没頭出来るよう、環境づくりに微力ながら努力しまた各水試とも協力し合って漁業の安定に役立てたいと念じています。

鹿部も時折、霧がかかり釧路の霧笛が鳴りつづけ、霧の中にぼんやりと浮ぶ、ヌサマイ橋や、ブロンズ像がなつかしく思い出されます。長い間の、皆々様のご厚情に感謝いたしますと共に、今後共、宜しくご指導下さるようお願い申し上げます。

最後に、皆々様のご健康とご多幸を心からお祈りいたし、ご挨拶いたします。

釧路水試を去って

中央水産試験場生物統計科長

阿部 晃 治

私が釧路を去ったその日は、二三日前にかかっていた道東特有の霧も晴れ、車窓に映る灰色がかった原野と青い海のコントラストが醸し出す風景が釧路の浅き春と私の仕事の未完成を憂えながらも、私に一つの仕事の終焉を告げているかのような日でありました。

私がこの海に初めて接したのは十九年前の大学生の頃、今は故人となられた恩師の小林喜雄先生に従って、釧路に魚類標本の採集に来た時でした。晩秋の荒れた海、その白く泡立った海岸線のみが、北の海の厳しさを象徴するかのよう、何故か今もなお、私の脳裏に深く刻み込まれております。しかし、この海を仕事場として、これから十八年余も過すことになろうとは、その時は夢にも思いませんでした。

昭和三十七年四月二日早朝、夜行列車から降りた私は、余市町のある道立水産試験場の本場からもらった辞令書を手、釧路支場の門をくぐりました。恐る恐る通された支場長室に於ける桜井基博支場長の開口一番の訓示は「先ず船に乗り、海から学べ」とのような内容で、着任早々に漁船に乗る事になりました。最初に乗ったのは、第六昭盛丸という一〇ト未満の小型えび桁曳網漁船でした。船は深

夜の二時頃に出港、海上は濃霧で多少ウネリがある程度でしたが、完全に船酔し、見兼ねた船主兼船長の池田兵市氏が、早めに帰港しようとして親切に言ってくれた程でしたが、ともかく最後まで頑張ったことが昨日のように思い出されます。

このようにして私の仕事はスタート、専門分野は一貫して資源畑を歩んできましたが、同時に多数の沿岸性の甲殻類や底魚などを受け持たねばならなかったことは、浅学非才の私にとっては荷が重く、且つ、次々とやってくる行政は業界需要に押し流されてしまい充分な研究成果を踏まえた内容で、行政や業界からの要望に応えることが出来なかったことが残念に思われてなりません。しかし、忙しき故に得られた貴重な情報、資料そして人間関係は、これからの人生に於いても得難きものがたくさんありました。これまでの人間関係を今後も大切にし、また得られた資料などは一日も早く整理して公表していくことが社会に対する私の責任と痛感しております。

最近の水産業をとりまく諸情勢は益々産業試験研究機関の重要性を高めていくと思えます。特に北海道の中でも多数の重要魚族資源問題を抱えている釧路水試の任務は重大であります。地域水試の任務と役割を果せるように諸種の改善を図り、内容の充実した指導が可能な、漁民からも信頼される釧路水試となっていくことを切望してやみません。

釧路水試を

離れるにあたって

函館水試資源科長

村上 幸一

釧路水試との出会いは確か昭和三十六年六月であったと記憶しております。当時、学生であった私は北洋サケ・マスの実習航海のため中継基地であった釧路市に始めて訪れました。その時、お世話になったのが水試です。今でこそ昔の面影を僅かとはぐさるだけになってしまいました。その頃久寿里橋のたもとにあった庁舎はかなり老朽化していて階段を昇るとギシギシときしむ音がしたことをおぼえております。よもや二年後、ここに勤務することになるとは思ってもみませんでした。

昭和三十八年四月、社会人として再び釧路の地を踏むことになった私には二年前とは違って職場に対する期待と不安とが錯綜し、まさに身の引き締まる思いがしました。

最初に手掛けたのは沿岸資源調査でトトン未満の備船で管内の前浜におじゃまをし、大変ご協力をいただきました。ある時は次の調査地に向う途中大シケにみまわれ予定の時刻を過ぎても到着せず先輩諸氏を大変はらは

らさせたことがありました。また、厚岸ニシシが沢山とれていて年代でもありましたのでリュックをせおってサンプリングに向いた事も今は懐しく思い出されます。

昭和三十九年、水試の機構改革にもなつて庁舎も一新して現在の副港に移ると同時に今後はサケ・マス・サンマ・スルメイカ・マサバなど回遊性魚類の資源調査にかかわるようになりました。周知のように、どの魚種をとりあげても道東地方を代表する季節の魚です。その消長は釧路市の経済に少なからぬ影響をもっております。それだけに業界からは絶えず資源の動向や漁況の照会が相次ぎ大変忙しい思いもしましたが、浜での漁業者皆様との対話を通して得た貴重な資料や情報、そして研究への刺戟、これらは私にとって生涯忘れることの出来ない貴重な体験でした。

今や二〇〇カイリ時代は定着したとも言われておりますが、先般の日韓漁業交渉、あるいは日ソ・ソ日漁業交渉にみるように豊かな資源に恵まれた本道は常にその渦中にありますし、さらに吾国漁業の再編整備問題等を含めて考えますと今後とも益々その色彩を強よめるものと思われれます。そのような時、試験研究機関の果すべき役割の重さが一層痛感されますし、私も微力ではありますが新しい

任地において釧路在動中に得た経験を教訓にして努力いたす所存であります。

皆様の益々のご発展を祈念いたしますと共に、一層のご指導、ご鞭撻をお願い申し上げます。

着任のごあいさつ

加工部長

北林 透

八戸港と競合して漁獲水揚日本一を標榜する釧路には、なんとない懼れを抱きながら陽春五月に赴任してきました。

なにぶん、前任地稚内は二百カイリ漁業規制により基幹となるスケトウタラの漁獲激減によって窒息したような街のただずまいであっただけに、釧路に移住して、漁業・産炭・製紙、三面の産業構造で形成されるこの街には、比較にならない活気と共に焦点を捉えきれない大ききさを感じております。

着任以来庁舎前面の副港には、銀鱗を光らせたサケマスが山積みされる壮観、青光りするイワシを船腹一杯にした船から間断なくトックに積み移される岸壁に漏り流れるイワシの血と脂、釧路ならではの光景を目のあたりにしてきました。

この四十万トン近いイワシの水揚げを可能ならしめた加工背景としてのミール生産は、大量そして完全処理の能力の面において之に匹敵する何物も有りませんが、道東一円に広く来遊し、加工適性を一蹴しえないイワシの有機的な加工処理を今一度洗い直して見るなど、地域の加工生産に如何に役立つか問い直しつつ努力致したいと存じております。

何分よろしくご教示ご指導下さいますようお願い申し上げます。併せて着任のご挨拶と致します。

着任のご挨拶

総務課長

表 谷 二三雄

函館女子トラピスト修道院、箱館戦争史蹟のある五陵郭、函館山より眺められる夜景の美しい街、函館。これが私の生れ育ちそして想い出多い学生生活を過ごしたところです。

昭和二五年四月函館水産試験場に採用され勤務し二十三年間良き先輩と同僚に恵まれ多くを学び、昭和四十七年一月設置された栽培漁業総合センター勤務となり、新設の部局でいろいろな新しい経験を積み乍ら、瞬く間に八年間が過ぎ去り、本年五月十日付で釧路水産試験場を命ぜられ、着任いたしました。

想えば、今日まで暮らした道南を離れるのが初めてであり、転勤の慌しさのうちに別れの辛さと不安を感じつつ、水産都市釧路に到着。全国的にも有名な霧の街、幣舞橋を通りすばらしい秋晴れ空を眺め乍ら早くも経過した現在、釧路の漁業地域としての雄大さと、漁業関係者の活気溢れる活動に接し、水産業の重大さを一層深くし、水産の試験研究推進のため研究部門と協力一致尽力いたしたく思っております。

何卒みなさまのご指導、ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

着任のご挨拶

増殖部魚介科長

富 田 恭 司

五月に十七年間勤めた稚内水紙より釧路水試に転勤を命ぜられ早や半年、霧のことはテレビ等でよく聞いていましたが、実際に経験するのは初めてでした。今年は例年になく霧の日は少なかったようですが、それでも日本海側と異なった霧の夏に戸惑い、秋の晴天続きに心浮かれ、また冬の雪掻きが無いと聞かされホッとしたり、同じ北海道でもその気候の違いに驚かされています。

ようやく三支庁管内を一巡して、日本海と

異なった海の色、水温、透明度、海藻の量等、如何にも生産力が高いと思われる海を見せていただき、大変勉強になりました。今まで栄養の少ないと云われている日本海を中心に仕事をして来た私には、又とない良い機会と、大いに海に出て調査に当たっています。

早く道東の気候風土に慣れ、漁組や指導所の皆様と一体となって、浅海生物の増殖のため努力してまいりたいと考えていますので、よろしくお願い致します。

着任のあいさつ

加工部加工科長

西 紘 平

さる五月十六日付けで余市の中央水試より加工部へ転勤を命ぜられました。水試に勤務するようになり七年目での転勤でサラリーマンとしては適当な頃ではないかと思っております。

さて、漁業生産の比較的少ない前任地と違い北海道、いや日本一の漁業生産を誇る当地の実情を観てやはりどの方も感ずる所でありましょうが、その規模のみならず、魚種、魚法の多彩さにも目をうばわれます。私の場合夏漁に差しかかる時季での来釧でしたので、その感さらに大きいものがあります。特に今年

は十年振りとかのイカの大漁で、日々驚きを新たにしております。

現在着任してすでに六ヶ月が過ぎようとしておりますが、管内の加工業態の実・内情を知るに従い前任地とはかなりの違いのあるのに正直な所やとまどいを感じている最中でありませう。又今迄手を染めた事のない仕事を持たされ一段と悩み多き、気のひき締る思いでおります。もとより微力ではありますが、皆様のお力添えで何んとか与えられた職務を全うすべく所存でおりますので、公私共々宜しくお願い申し上げます、公私共々宜しくお願い申し上げます、公認共々宜しくお願い申し上げます、公認共々宜しくお願い申し上げます。

着任に当って

資源科研究職員

鳥 沢 雅

十九年間に亘る学生生活と訣別し、本年四月一日付で釧路水産試験場研究職員として社会人の第一歩を歩み始めました。

三月末、期待と不安の交錯する中で函館から釧路へと向かう車中、釧路も目前という大楽毛近くの川辺で一群れの野性のエゾシカ達

が遊ぶ光景に遭遇し、幻想的なその光景が、その時の心境をより一層複雑なものにしたのを今でもはっきりと覚えております。

それからは、何が何やら分からぬままに、あっといいう間に半年が過ぎ、現在に至って居りますが、この短い期間に実際の漁業を通して得た体験、知識は学生時代に得たものとはまったく異質な貴重なものであったと同時にこれからの自分に課せられた責任の重さを強く感じさせるものであります。

未だ何も知らないに等しい未熟者ですが、微力ながらも釧路の水産業のため努力する所存で居りますので、皆様方の御指導、御鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

転 出 職 員

氏 名	転 出 先
細 谷 幸 一	中央水試総務部
原 信 義	栽培漁業総合センター総務課長
相 沢 悟	稚内水試加工部長
滝 襄	〃 増殖部長
阿 部 晃 治	中央水試漁業資源部生物統計科長
村 上 幸 一	函館水試漁業資源部漁業科長

退 職 職 員

大 島 浩	前加工部長
-------	-------

寄り昆布

◇ 表紙の写真は今年十月四日に千代の浦のサケ定置網（北島哲夫氏所有）で獲れ、釧路東部漁業協同組合を通じ提供頂いた雌雄同体のシロザケ（体長七十cm）の生殖巣です。

サケの雌雄同体は過去に数例見えておりますが、写真のものは二つの精巣の内左側の精巣の一部がくびれ、その隙間に未熟な卵巣が付着していたもので非常に珍らしい例です。

奇形魚や珍らしい魚貝類の出現動向がその時の海の生物環境を知る上で重要な手がかりになることがあります。今後とも珍らしい魚が獲れた時には当场に持参頂きたくおねがい致します。

（写真・文 鳥沢 雅）

◇ 十一月三日釧路市文化賞を授賞されました 桜井 元 場長のご答辞に、この榮譽は、今、全道に散っている研究者一同と頑ち合いたいとの奥床しいお言葉が含まれておりましたことをお伝えすると共に、祝意を表します。

◇ 各地で磯焼けが問題になっていますが、今までないと信じられていた道東でも磯焼けが進行しており、対策が急がれます。道東で磯焼けを起しているのは、無節石灰藻のキタイシモとエゾイシゴロが主な種類で、他にミヤベオコシも多く見られます。

◇ 銅・錫・コバルトなどの重金属イオンは魚介藻類は勿論、人体にも悪影響を与えます。特にコンブなどの藻類は敏感に反応しますので、重金属イオンを利用した防藻剤の使用には慎重を期したいものです。

◇ この春からの人事移動で当水試では十三人の人々が入れ変わりましたので、ご参考までに職員名簿と転出、退職職員名を載せました。

◇ 昭和四十七年来、加工排水処理などに活躍されました大島 浩前加工部長が九月末日で退職されましたが、今後、釧路市水産加工業協同組合の参与などの立場で釧路と関わりをもたれます。

釧路水試だより 第46号

発行年月日 昭和五十五年十一月十五日

編集発行人 結城了伍

発行所 釧路市浜町二の六

印刷所 北海道立釧路水産試験場
釧路総合印刷株式会社